

天野明

（平成二十七年九月号）

ピンピンと春光折りて初蝶が渡り終はれば川に音満つ

磯蟹が割れ目に逃げて我を見る貌貌貌貌貌貌

熱心に碁を打つ羅漢見る羅漢被曝塗れを承知して居る

沖繩の悲憤やうやく今にして臍腑に沁むるフクシマの我

老二人日暮れになると泣きはじむ「大熊町」へ還る還ると

不全なる七十七基の線量計その数値信じつづけし四年間

放射線高き細雨にずぶ濡れの鴉一羽電柱に啼く

●作者の言葉

斎藤佐知子先生ありがとうございます

ございました。短歌入門書

読みますと秀歌鑑賞と多作が

大切と説いており努力をして

おるのですが、一向に上達いたしません。

努力不足と思いますが、ど

うも知識や技巧を越えたも

の、作者の土台というのか、

生きざまというのか、そういったものが根底にあって、それこそが大切なのかなと、この頃少し思うようになりました。鈍才ですが上記のことを忘れないで努力しようと思っております。

●選者の言葉

天野明氏は福島、いやフクシマと表記されるべき不運な地に住む。異常が日常となってしまうた生活を淡々と静かに、的確な比喻を用いて描写する。作者の深い感慨はその静かさゆえに次第に読者へ、特に当面は直接被害を受けずに済んだ私のような立場の者へ、恐怖の予感、不安をもつて伝わってくる。

ピンピンと春光を折って飛ぶ初蝶など瑞々しい表現力も魅力的である。

その他印象に残った作者として、鋭い問題意識を持つ保苺明子、対照的に繊細な感性の松本秀一、オノマトペへの執念を感じさせる石田郁男、余裕の遊び心を見せる鈴木陽美、機知に富んだ大谷ゆかりの諸氏を期待をこめてあげておきたい。

